＜前回＞黒人神学

（１）解放の神学とその多様性

（２）黒人神学と社会的構想力

３．黒人神学

「「キリスト教国アメリカ」の病根、人種差別という悪に、教会人が初めて踏み込んだのは、六〇年代後半、ブラックパワーと黒人意識の高まりという政治文化的な大衆運動を背景にしてのことだった。黒人神学という言葉を最初に掲げた神学書は、六九年、当時まったく無名だったコーンの書いた『黒人神学とブラックパワー』（邦題『イエスと黒人革命』新教出版社、七一年）だった。キリスト教の使命は「神の顕現を、虐げられた者の実存的情況に照らして解明し、解放の力を、福音の中心たるイエス・キリストに結び合わせることである」。ブラックパワーに触発された若きコーンはそう宣言して、黒人解放こそ現代のイエスのわざに他ならないと言い切った。二十世紀後半のアメリカ神学を綴るとき、ジェイムズ・コーンを抜きにして語ることは到底できない。」（栗林輝夫『現代神学の最前線』新教出版社、76-77 頁）

４．コーン『抑圧された者の神』新教出版社。

５．コーンの黒人神学における社会的構想力の問題

イデオロギー批判：福音の解放性・真理の歪曲、普遍性の偽装

「人種問題に関する社会分析の導入」（栗林、78）

物語の特殊性（自己同一性としてのイデオロギー）

とその複数性（他者への開放性）

６．社会的構想力：経験と聖書との間（二つの地平）

芦名定道『近代日本とキリスト教思想の可能性――二つの地平の交わるところ』三恵社　2016 年。

経験：個人と共同体　→　特殊と普遍

物語：解放、解放する真理、解放の物語　→　ユートピア

聖書：夢の素材そして規範、聖書を通した他者の物語への開放性

↓

人間的現実性を構成する虚構の働き

小坂井敏晶『民族という虚構』東京大学出版会。

７．キリスト教神学（思想）の解釈学的構造：

聖書的地平と思想主体の歴史的地平、問いと答え。

（３）黒人神学の展開

８．コーン（ヴァージニア・ファヴェリア、R.S.スギルタラージャ編『〈第三世界〉神学事典』日本キリスト教団出版局）

「ジェームズ・コーンが *A Black Theology of Liberation*〔訳注：『解放の神学――黒人神学の展開』梶原寿訳、新教出版社、1973 年〕を出版したのは、1970 年、*God of the Oppressed*〔訳注：『抑圧された者の神』梶原寿訳、新教出版社、1976 年〕は 1975 年に出版された合衆国の重要な黒人神学者としては、他にドーティス・ロバーツ（J. Deotis Roberts）とゲイロード・Ｓ．ウィルモア（Gayraud S. Wilomore）がいる。

1980 年代から 1990 年代にかけて、黒人の神学は主に三つの方向に展開した。すなわち、ウーマニスト神学の勃興、聖書研究における新しい声の発現、そしてアフリカ人奴隷の宗教への回帰である。」（コーン、191）

９．コーン（現在、ユニオン神学校、組織神学教授）とコーン以降

「コーンの次の世代で、特異な存在感のあるコーネル・ウェスト」「現代アメリカ黒人知

識人の最先端」、「鬼才」（栗林、78-79）
「二〇〇二年」「アメリカ・アカデミズムの最大のゴシップ」、ハーヴァード大学からプリンストン大学への移籍。現代哲学の諸潮流＋バプテスト系の黒人神学者。
「第三世代」「ジェームズ・H・エヴァンズ」（85）
10．C・ウェスト『民主主義の問題』（原著、2004 年）
・「民主主義は恐ろしい状況に陥っている」
「民主主義にとって最大の脅威は、支配的な影響力を持つ三つの反民主主義的な教義・ドグマという形で台頭」
「自由市場原理主義」「市場を偶像と物神にしている」
「攻撃軍事姿勢」「潜在的な敵に対する先制攻撃」
「権威主義」「愛国者法」「市場に動かされるメディア」
↓
・「民主主義へに対する人びとの深い敬意」「愛」「三つの重要な伝統」（19）
「ソクラテスのように問い続けることに献身すること」（みずから、権威やドグマ、偏狭さや原理主義）
「ユダヤ教が産み出した預言者による、すべての民族にとっての正義への献身」
「希望に悲喜劇的に献身すること」「ブルース」「ジャズ」
・「アメリカにおけるニヒリズム」
「希望や愛の途方のない崩壊」「市場の力や市場道徳が黒人の生活の隅々にまで染みこんでいること、黒人の指導者が危機的な状態にあること」（30）
「精神的な落ちこみ、自分には価値がないという思い、および社会的な絶望はアメリカ全体に蔓延している」（31）
「一般に人びとがアメリカの民主主義体制に幻滅しているのも無理はない」
「エヴァンジェリカル・ニヒリズム」「温情主義的ニヒリズム」「感傷主義的ニヒリズム」
・「マーティン・ルーサー・キング牧師」「彼がこの世を去ってから、もっぱら人種の論理による要求によって市民生活が保守的に再編されるのを目にしてきた」、「アメリカの政策の南部化、アメリカの学校や教会、地域コミニュティでの事実上の人種隔離」（64）
「黒人コミュニティも、上流・中流階級対弱体化したスラム・コミュニティに二極化して、ますます分断が進んでいる」、「政治文化の空洞化をさらに後押ししているのが、宗教右派の台頭」（72）
11．「第一世界における第三世界の神学」（ヴァージニア・ファヴェリア、R.S.スギルタラージャ編『〈第三世界〉神学事典』日本キリスト教団出版局）
「第三世界神学者エキュメニカル協会」「第三世界におけるフェミニスト神学」「第三世界の女性の神学」
12．ウーマニスト神学
「黒人男性の解放の神学にはアフリカ系アメリカ人女性の姿が見えないため、黒人女性は沈黙を破って「ウーマニスト神学」を語り始めた。「ウーマニスト」という言葉は、アリス・ウォーカー（Alice Walker）の *In Search of Our Mothers' Gardens*（1983）」「から採られたもので、彼女はこの言葉を、「男性女性を問わず民族全体の生存と充実に身を捧げる」「黒人フェミニスト」と定義している。」（コーン、191）
「デローレス・ウィリアムズ（Delores Williams）、ジャクリーン・グラント（Jacquelyn Grant）、ケリー・ブラウン・ダグラス（Kelly Brown Douglas）、ケイティー・G．キャノン（Katie G. Cannon）」
（4）近代の問い直し＝奴隷制とコロニアリズムの近代

14．テオドール・ウォーカーの場合。

ウォーカー：大西洋を横断した近代奴隷制の成立こそが近代のメルクマール――「近代の歴史をそれ以前の歴史から区別する主要な出来事」――であることを、黒人神学（Black Theology）の立場から主張。

15．ウォーカー：近代の決定的メルクマール＝近代奴隷制。なぜなら、人間と土地を商品化（commodification）する制度は、近代的な人間関係の理解にとって本質的なものであり、近代的なアイデンティティに決定的な影響を与えているからである。

「アフリカ的アイデンティティは植民地主義と大西洋横断的奴隷制の後に生じた」、「同じことは他の近代的なアイデンティティにも妥当する。これらの他のアイデンティティには、ヨーロッパ的、ヨーロッパーアメリカ的、白人的、黒人的、肌の赤い、アメリカ・インディアンの、そしてネイティブ・アメリカンのアイデンティティが含まれる。これらの色でコード化され土地に定位した語彙、そしてそれ関連した諸理論は、大西洋横断的な発見、征服、奴隷、植民地主義に対する応答の中で溶け合っている。」（ibid., 11）

↓

大西洋横断的な近代的奴隷制度に近代のメルクマールを求めるならば、近代は 17 世紀から 18 世紀の近代科学の形成期から遡ること数百年前の 15 世紀にその出発点を見いださねばならなくなる。

なぜなら、「1444 年 8 月 8 日、ポルトガルによってアフリカから 235 人の商品化された人間の売買が積み荷として船積みされた」（ibid., 15）から。また、この場合、「近代主義の克服とは、奴隷商人、奴隷保有者、そして近代的な経済的社会的関係から利益を得た他の人々によって共有された世界観の克服を意味する」（ibid., 10）。

そして、奴隷制は古代ギリシャやローマの遺産とも言える側面を有しつつも、「近代的奴隷制は、キリスト教徒によって生み出され継続された」（ibid., 21）ことは、この近代をキリスト教との関わりでいかに理解するのかという問題と無関係ではないのである。

６．アジアの解放の神学

Ａ．民衆神学

（１）民衆神学の意義

「一九七五年五月に私は初めて韓国に来て、ソウルの韓国神学校で安炳茂教授と知り合った。私は都市産業伝道協議会（東京）のための「民衆の闘いおける希望」に関する講演を準備していた」、「しかし、私たちがキリストの教会と民衆についてよく考えてみる気持にさせられたのは、新約聖書学者安炳茂の「マルコによる福音書におけるイエスと貧しい民」に関する、ハイデルベルク大学学位論文によってであった。」（モルトマン『神学的思考の諸経験』新教出版社、308-309 頁）

「先立つ「黄色人種の神学」のように、民衆の神学は文化的・土着的に形成された神学ではなく、韓国において苦しんでいる民衆の文脈的神学であり、それゆえイエスによって祝福された全世界の神の国の民にとって開かれている。人権と公民権のための闘いと結びつけられ、キリスト者たちを「教会の民」から「民衆の信仰共同体」にする限りにおいて、民衆の神学は、韓国における最初の政治神学でもある。」（312）

「アジア神学は民衆の困窮という現実を抜きにしては語れない。そのことを強く押し出したのは韓国の民衆神学だった」（栗林輝夫『現代神学の最前線』新教出版社、125）、「欧米神学のままでは民衆の心に福音が響かないことを悟った。いったい韓国の風土の中で人々に呼応できる神学とは何か。欧米の借り物ではない韓国民族の心を顕わす神学、民衆の苦難と歩みを共にする預言者的言説を創り出すにはどうすればいいのか。」（126）

（２）発端あるいは文脈

1884：朝鮮最初のプロテスタント教会設立（松川）、李樹延訳「ヨハネ福音書」「使徒行伝」刊行（横浜）
1894：東学革命、日清戦争
1905：日韓協約（保護条約）で外交権喪失
1906：日韓総督府設置（伊藤博文）
1910：日韓併合、「100 万人救霊運動」
1919：三・一独立運動
1935：神社参拝問題始まる
1937：日中戦争
1939：神社参拝強要
1941：太平洋戦争
1945：日本降伏により解放
1948：大韓民国成立
1950：六・二五動乱（朝鮮戦争）
1961：朴正熙少将による五・一六クーデター
1965：日韓条約締結
1972：非常戒厳令宣布、維新憲法発布。
1973：金大中事件
1974：大統領緊急措置法宣布
1976：「民主救国宣言」を発表
1979：朴正熙大統領暗殺、維新体制の終わり。粛軍クーデター
1980：光州民主化運動
1987：大韓航空機爆破事件
1988：盧泰愚大統領、ソウルオリンピック

「軍事独裁政権」「このような韓国的な背景の下で台頭した神学が「民衆神学」である。もちろんこれは、当時世界の神学界において流行していた政治的、社会的、経済的な差別に抗議する「疎外された者の観点から見る神学」、すなわち「解放の神学」、「黒人の神学」、「フェミニスト神学」などのパラダイムと軌を一にするものであり、相互に影響を与え合ったことは明らかである。しかし、「民衆神学」は韓国的な状況という独自の背景を前提にしなければ、想定し難い独自の目標と方式をもつ神学体系である。したがって「民衆神学」は、時代状況から離れては、その神学理論と実践目標について議論することができないという徹底した状況神学なのである。」（徐正敏『韓国キリスト教史概論――その出会いと葛藤』かんよう出版、2012 年、93-94 頁）

「民衆の神学は、一九七〇年代の韓国の民衆の自由を求める闘いの中で形を形成してきたことは事実である」（李仁夏・木田献一監修、キリスト教アジア資料センター編『民衆の神学』教文館、1984 年、1 頁）、「しかし、その根は決して浅いところにない」、「韓国教会の一〇〇年に及ぶ歴史を読めば読む程に、信仰理解は伝統的に保守的でありながら、宣教の当初から日帝の植民地支配の抑圧からの解放の希求と闘いの歴史的文脈の中で福音のメッセージを聞いてきたことがわかる。」（李仁夏、2）
「「民衆の神学」は韓国のキリスト者を中心とする民主化闘争から生まれてきた神学である。そのことは、一九七六年三月一日に出された「民主救国宣言」の署名者たちが、同時に「民

衆の神学」の中心的指導者であることに端的に示されている。」（木田献一、2）

（３）韓国民衆史の中で

李仁夏・木田献一監修、キリスト教アジア資料センター編
『民衆の神学』教文館、1984 年。
監修のことば（李仁夏）
序文（木田献一）
１．韓国における民衆と神学――アジア神学協議会についての伝記的報告（徐洸善）
２．韓国仮面劇に対する神学的一考察（玄永學）
３．恨の形象化とその神学的考察（徐南同）
４．民衆的視点から見た韓国キリスト教史概略（朱在鏞）
５．民衆のメシア運動としての韓国キリスト教（金容福）
６．旧約聖書の民衆理解（文熹錫）
７．マルコ福音書におけるイエスと民衆（安炳茂）
８．二つの物語の合流（徐南同）
９．メシアと民衆――政治的メシア主義に対峙するメシア的政治の追求（金容福）
補論　一九七〇年代における韓国神学の展開（徐洸善）
筆者紹介
あとがき（蔵田雅彦）

・「韓国における民衆と神学――アジア神学協議会についての伝記的報告」（徐洸善）
「徐南同はその「二つの物語の合流」についての論文において、現在の民衆の神学は、現在に対して歴史のパラダイムを提供している、以前の歴史の続きなのだと論じている」
「(一九一九年の）三・一独立運動」「(一九六〇年の）四・一九（学生）革命」「今日の韓国人が、自らの主体性をはっきりさせるとき、東学運動―独立運動―三・一運動―四・一九革命という系譜を自分たちの民衆運動の系譜として述べること」（李仁夏・木田献一監修、キリスト教アジア資料センター編『民衆の神学』教文館、1984 年、30 頁）
「彼が試みているのは、まず最初にその文学、感情、演劇等に現われている民衆の社会的伝記を読み、そこから民衆の歴史の動態を描き出すことである。」（32）
「徐が観察しているように、「儒教の厳しい女性差別強要のもとでは、女性の存在は恨そのものである」」、「恨は韓国女性の伝記や物語、小説、詩、劇等に避けがたく現われてくる、心理・社会的用語である」（33）
「民衆の外国勢力によって束縛されてきたことを自覚しながら、しかも民族独立の感情を押さえなければならない時に、恨の感情は心理的・政治的怒り、挫折感、憤りの次元へと高まっていく。恨は個人的心理の次元と共に社会的・政治的次元における自覚である。」（34）
「抑圧された民衆の集合的恨の堆積から産み出されうる積極的要素」（35）
「徐は彼の論文において、恨を描いている韓国の仮面劇について、生への目的を粘り強く探求している民衆劇として言及している」（35-36）

「七〇年代の韓国の民衆史の事件の「現場」に帰って、そこに両足をしっかりと立ち、「民衆神学とは何か」を熟考しなければならない。そうせずしては、七〇年代の韓国民衆史の心臓部に根ざしたキリスト教神学の一株の青い木である「民衆神学」の生命性を、しっかりと把握することはできない。」（朴聖焌『民衆神学の形成と展開――一九七〇年代を中心

に』新教出版社、1997 年、6 頁）
「民衆神学の根を探ってみると」「更に探ってみると遠くは五千年の民族文化の遺産に土壌に根付いており、近くは一〇〇年余年の韓国のキリスト教の民族・民衆的伝統の血脈野中に着実に根を下ろしていることがわかる。」（27）

（４）聖書の文脈で

・「「民衆を発見するまで」と『ガリラヤのイエス』で、安炳茂は、かれが西欧の学問的神学を脱して、ついにテキストの背後の「イエスの民衆」を探しだすまでの長い道程を述べている。その概略を記してみる」（106）
「《一生を通しての私の関心は、「神学」ではなく「歴史のイエス」だった。この言葉は、イエスに執着するのはアカデミックな関心からではなく、イエスの生きざまをたずね求め、そこに参与したいという目的からであったという意味だ。・・・編集史的研究で致命的なことは、福音書編者たちの「神学」は発見したが、「歴史のイエス」については、むしろ一層遠ざかる結果に陥ったという事実だ。とにかく、西欧神学の領域で「イエス」を追求していた私の努力の結果は「歴史のイエス」に対する「不可知論」に至るだけであった。・・・朴正熙軍事独裁政権下で、多くの悲劇的事件が起きた。苦難に満ちた民衆の絶叫は、教会と神学のゲットーの中に安住していた牧会者たちと神学者たちの耳にまで聞こえてきた。・・・われわれは、なんら神学的整理をなしえないままに、民衆の現場に引き込まれていった。民衆との提携は、自動的に苦難をともなった。苦難の現場でわれわれの「問い」が変わり、その位置から思いがけず、福音書に描かれた「受難のイエス」に出会うことになった。・・・ガリラヤのイエスと民衆は、互いに区別されない「イエス民衆」として一つであって、イエス民衆と韓国民衆が互いに血が通う関係となる体験をした。われわれはついに「歴史のイエス」と、われわれの現場で出会ったのだ！》」（106-108）
「神学の「問い」が変わる。これは「民衆の目で」見るというのと同じである。すなわち、視座が変わるのである。その問いが聖書の中に解答を求め、聖書の「民衆」（オクロス）を発見するようになり、そのオクロスの現実と今日の民衆の現実が共鳴を起こし、伝統的な答えとはまったく異なる「答え」を得るようになった。この場合、「問い」は民衆の問いであり、「答え」も民衆の答えである。」（108）
・「問いと答え」の思考構造、神学思想の解釈学的構造。

「福音書のなかでイエスは、ただ「イエス民衆」としてのみ存在する。だから「イエス民衆」はイエスの別の名前だ。ここで、西洋神学の「イエス」と「民衆」という「主客図式」は立場を失う。」（107）
「「徐南同教授が『罪とは支配者の言語であり、民衆にあってはそれがハンだ』と言ったが、これは実に鋭い認識だと思います」。徐南同は次に、われわれすべてを解放する「メシア」は苦難を受けている民衆のうめきの声、すなわち「ハンの声」に乗って来られる、と言う。われわれの時代の苦難を受けている隣人、特にわれわれが「構造的悪」とヨブもののために苦しみを受けている隣人の絶叫においてキリストに出会うことができないとすれば、われわれは他のどこにおいてもキリストに出会うことはできない、と徐南同は断言する。彼はこれを指して「苦難を受ける民衆のメシア性」または「ハンの贖罪的性格」と言う。」（212-213）

（５）二つの物語の合流

「「二つの物語（聖書および教会史の民衆伝統と韓国歴史の民衆伝統）は合流した。民衆神学者たち、とくに徐南同と安炳茂の信仰と人格の中から激烈で劇的な「合流」が起こった。」（111）
「キリスト教の民衆伝統と韓国の民衆伝統との合流」、「韓国の民衆神学の課題は、基督教の民衆伝統と韓国の民衆伝統が、現在韓国教会の＜神の宣教＞活動において合流していることを証言することである。現在目の前に展開している事実と出来事を、＜神の歴史介入＞、聖霊の歴史、出エジプトの出来事とであると知ってそれに参与し、それを神学的に解釈する仕事である」（李仁夏・木田献一監修、キリスト教アジア資料センター編『民衆の神学』教文館、1984 年、307 頁）
「金芝河の民衆神学」「『張日譚』の構想メモ」（308）
「韓国で二つの物語が合流した一つの模範的事例として金芝河の「張一譚」の物語を取り上げている徐南同は、その神学的意味をこのように述べている。「張一譚」の会報の福音は神学の土着化を決定的な課題とする。金芝河はイエスの物語である福音書と民衆の恨の物語であるパンソリを結合しようとするものである。そうして韓国的、民衆的神学を形成してみようとする。パンソリの辞説である「張一譚」の物語は、イエスの話の記録である「ヨハネ福音書」の進行と似ている。」（250）
「《メシが天であります
天を独りで支えられないように
メシは互いに分かちくらうもの
メシが天であります
空の星をともにみるように
メシはみんなが分かちくらうもの
メシが口にはいるとき
天がわが身に迎え奉り
メシがてんであります
ああ、メシは
みんなが分かちくらうもの》」（248）

合流は融合か？

（６）民衆の神学と日韓の交流

日本の聖書学研究の分野では、民衆の神学との交流が見られる。
・木田献一
・荒井献『イエスとその時代』岩波新書、1974 年。
「あとがき」「地下にある韓国のキリスト者学生諸氏から私のもとに送られてきたメッセージ」
・大貫隆「マルコの民衆神学――安炳茂氏との対話」（富坂キリスト教センター編『民衆が時代を拓く　民衆神学をめぐる日韓の対話』新教出版社、143-211 頁）
↓
マルコとパウロ、民衆伝承とケリュグマという論点

（７）民衆神学のその後、民衆神学は終わったのか

・状況的文脈的神学は、その状況の変化によって、本質的な壁に直面する。民主化され豊かになった韓国、90 年代以降の韓国社会のどこに民衆が存在するか。

しかし、状況的神学が「神学」として存立するには、それが状況に還元されない超越的意味の次元を具体化することが必要だったのではなかったのか。実は、「民衆」は新しい文脈のどこにでも存在する。神学は新たな合流を求めている。

・解放と土着化とは、一つのプロセスの二つの契機ではなかったか。

普遍と特殊の関連性を問い直す作業が必要である。解放／普遍―土着化／特殊

＜参考文献＞

１．日本基督教団出版局編『アジア・キリスト教の歴史』日本基督教団出版局、1991 年。

２．森本あんり『アジア神学講義　グローバル化するコンテクストの神学』創文社、2004 年。

３．池明観『アジア宗教と福音の論理』新教出版社、1970 年。

４．土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、1980 年。

５．河部利夫「アジア共同体への展望とキリスト教の役割」（日本超教派基督教協会編『アジアとキリスト教』星雲社、1987 年）。

６．李大栄「宣教百年を迎える韓国教会の現状と未来」（日本超教派基督教協会編『アジアとキリスト教』星雲社、1987 年）。

７．Werner Ustrof, Toshiko Murayama（eds.）, Identity and Marginality. Rethinking Christianity in North East Asia, Peter Lang, 2000.

８．富坂キリスト教センター編『鼓動する東アジアのキリスト教――宣教と神学の展望』新教出版社、2001 年。

９．柳東植『韓国のキリスト教』東京大学出版会、1987 年。

10．徐正敏『韓国キリスト教史概論――その出会いと葛藤』かんよう出版、2012 年。

11．李仁夏・木田献一監修、キリスト教アジア資料センター編『民衆の神学』教文館、1984 年。

12．CCA 都市農村宣教部編、キリスト教アジア資料センター訳
『民衆の神学をめざして』新教出版社、1983 年。
（Urban Rural Mission Christian Conference of Asia*, Towards A Theology of People*, Hong-Kong, 1977.）

13．富坂キリスト教センター編『民衆が時代を拓くする　民衆神学をめぐる日韓の対話』新教出版社、1990 年。

14．安炳茂『民衆神学を語る』新教出版社、1992 年。

15．朴聖焌『民衆神学の形成と展開――一九七〇年代を中心に』新教出版社、1997 年。

16．モルトマン『神学的思考の諸経験』（組織神学叢書６）新教出版社。
第三章「解放の神学の鏡像」第四節「支配階級にとっての民衆の神学」（308-330 頁）
『わが足を広きところに　モルトマン自伝』新教出版社、2012年。

17．the Commission on Theological Concerns of the Christian Conference of Asia（CTC-CCA）ed., *Minjung Theology. People as the Subjects of History*, Zed Press, 1981.
Preface（James H. Cone）

Ｂ．ピエリスの解放の神学

Aloysius Pieris, S.J., *An Asian Theology of Liberation*, T & T Clark, 1988.

1．ピエリス：宗教と文化の二分法に基づく従来の土着化論――ヨーロッパ文化からキリスト教を分離してそれを非キリスト教的宗教を取り除いたアジア文化へ植え付ける――はアジアの宗教文化には適用できない。

2．近代キリスト教を典型として形成された宗教概念がアジアの宗教文化の分析にどの程

度適応できるか、というピエリスが提起する問いは、現代の宗教学あるいは神学（宗教の神学）でも、共有されている問題である。宗教的多元性を前提とした現代宗教学あるいは神学（宗教の神学）の動向については、次の文献を参照。

古屋安雄『宗教の神学――その形成と課題』ヨルダン社、1985 年。

John Hick, *An Interpretation of Religion. Human Responses to the Transcendent*, Yale University Press, 1989.

3. では、アジアの現実の中で土着化はいかに行われるべきか、そもそも何のための土着化か。
4. ピエリス：土着化自体を否定するわけではない。しかし、土着化はそれ自体が目的として追求されるべきものではなく、むしろそれはキリスト教の本来の「貧しい者に対する使命（＝解放）」に伴うもの、アジアの諸国家を福音化する使命の副産物なのである。あるいは、より正確には、「土着化と解放とは、適切に理解されるならば、同一のプロセスに対する二つの名なのである」（Pieris,111）。
5. この解放＝土着化のプロセスは、アジアにおいていかにして実現すると考えられるのか。
6. ピエリス：貧しい者の解放はアジアのマイノリティとしてのキリスト教によってのみ担われうるものではなく、キリスト教は、この解放のためにこそ、諸宗教との関わりを必要とすると考える。キリスト教が伝来するはるか以前から、アジアの「偉大な（禁欲的）な諸宗教もまた、アジアの貧しい者に対する解放のメッセージを所有して」いたのであって、実際、貧しい者の解放の希求は、アジアの諸宗教においてこそ表現されてきたのである。キリスト教は、その声を聞き分けねばならない。「アジアを福音化することは、キリスト教的あるいは非キリスト教的なアジアの宗教性の解放的次元を貧しい者の内に呼び覚ますことなのである」（Pieris,41）。これは、キリスト教とアジアの諸宗教との対話が貧しさからの解放という目標を共有することによってこそ正しく方向付けられ得ることを意味する。
7. アジアの諸宗教が、アジアの貧しい者に対する解放のメッセージを実現するという共通の使命を遂行するための協力者であるとの主張（Pieris, 36）は、おそらくは、アジアの宗教的多元性の優れた特性に関わるものと言える。

   同様の主張は、ヒック、ニッター編『キリスト教の絶対性を超えて』春秋社（John Hick and Paul F. Knitter（eds.）, *The Myth of Christian Uniqueness. Toward a Pluralistic Theology of Religions*, Orbis Books, 1987.）に所収のピエリス「ブッダとキリスト：解放の仲介者」（317-345 頁）にも見られるが、同論集に収録されニッター「「解放の神学」の視点から「宗教の神学」を建設するために」（347-390 頁）はこのピエリスらの議論に対する欧米神学からの一つの応答と言えよう。
8. この共通の課題を自覚するからこそ、キリスト教は仏教との積極的な関わりを志向しなければならない。→「宗教の神学」へ
9. 土着化を論じる場合に、「どの文化」「いかなる社会階級」が念頭に置かれているのか、という問い（Pieris,40）。キリスト教は、アジアの豊かな社会的エリートの文化への土着化を目指すのか、あるいは貧しい者の文化への土着化を目指すのか。この問いに対してどのように答えるかによって、土着化の持つ意味はまったく異なるものとなる。
10. 芦名定道「南インドのキリスト教の諸問題」、亜細亜大学アジア研究所『アジア研究所紀要』第 27 号、2001 年、191-218 頁。

    「キリスト教にとっての仏教の意味――近代日本・アジアの文脈から」、日本近代仏教史研究会『近代仏教』第 20 号、2013 年、7-19 頁。